

經濟地理学会

第 17 回 大 会

1 9 7 0

4 月 2 9 日 (水)

於 品 川 労 政 事 務 所

会 員 各 位

陽春の候会員各位にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、当学会第17回大会を品川労政事務所において開催いたします。時節柄ご繁忙のことと存じますが、万障お繰り合わせの上ご光臨を賜わりたく、ご案内申し上げます。

敬 具

1970年4月29日

経済地理学会

会 長 江 沢 護 爾

日 程

日 時 昭和45年4月29日(水)

9:10 受付

9:30 開会

9:45

] シンポジウム報告

12:30

12:30

] 昼食, 休憩

13:30

13:30

] 総会

14:20

14:30

] シンポジウム討論

17:00

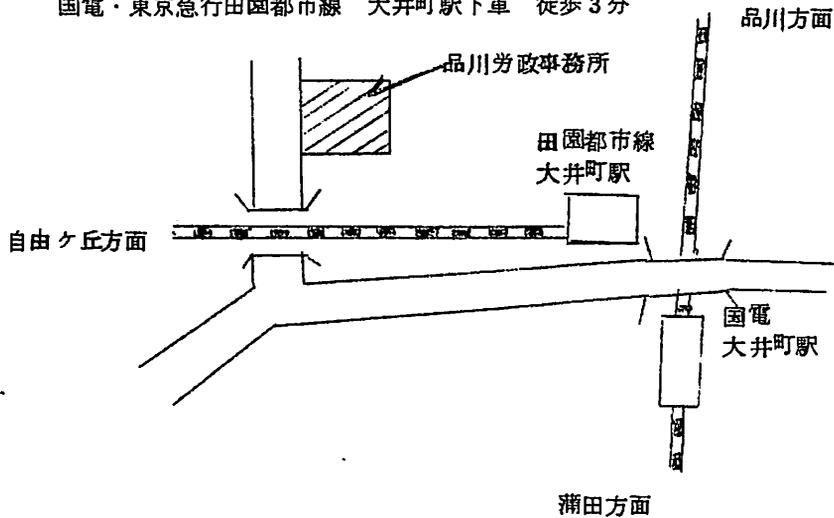
17:00 閉会

会場案内

品川労政事務所

品川区広町2-1-36 TEL 774-6212

国電・東京急行田園都市線 大井町駅下車 徒歩3分



大会次第

A.M. 9:45~12:30

シンポジウム；経済地理学における「地域」概念

座長 西川大二郎（法政大），奥野隆史（青山学院大），高橋伸夫（東教大）

報告者 奥田義雄（中央大学）

「経済研究における地域概念の基本的性格」

高橋潤二郎（慶応大）

「経済地域区分—基本的データ処理過程とその問題点—」

石原照敏（香川大学）

「経済地域概念への接近—国民経済の地域構造—」

P.M. 12:30~13:30

昼食，休憩（この間に評議員会・幹事会）

P.M. 13:30~14:20

会員総会

P.M. 14:30~17:00

シンポジウム討論

座長 西川大二郎・奥野隆史・高橋伸夫

P.M. 17:00

会長挨拶 閉会

経済研究における地域概念の基本的性格

奥田 義雄

序. 社会の政治経済的發展の地域的性格に関する諸研究にとって、“地域”の概念の適確にして共通の理解が必要なことは言うまでもない。しかしながら、それは単に素朴経験的な過程を通して体験的に把握されるものでもなければ、逆に先験的な思索によって観念的に規定されるものでもない。“地域”の概念規定は、地域概念の認識論的・哲学的な考察を基礎にして、これに諸科学における地域概念の学説史的・思想史的な検討を加えることが必要なのである。これをつぎの諸項目に分けて論じることとする。

I 現実世界と“地域”の概念 まず、はじめに地域という言葉つまり“地域”概念の論理的連関とその哲学的な意義を明らかにしておきたい。地域・分布・拡がり・空間などという類似の概念が、どの様に関連をもち、どのように異なるのか。現実世界の認識の基本的問題としてこれら諸概念の正確な用語法と意味についても考えてみたい。

II 研究対象としての経済地域 前章の考察をふまえたうえで、つぎに研究対象として、経済地域あるいは地域概念が、どのように扱われ、扱われてきたのであろうか。これを a. 伝統的地理学, b. 近代経済学, c. マルクス経済学のそれぞれにおける地域概念について検討する。

III 社会・経済地域と自然地域 社会・経済の地域的関連をどのような対象として捉えるかの問題は、同時に、社会・経済と自然との関連をどのように捉えるかの問題と絡みあっている。これを前述の a, b, c の諸学における対象の理解の問題として述べる。

IV 経済地域研究における地域的認識方法 つぎに、諸学における経済地域に対するアプローチの仕方がどのように異なるか、を検討し、地域認識の方法論的相違を明らかにすることによって、逆に諸学における地域概念の相違を示したい。

V 現代世界における地域政策・計画と地域概念 最後に現代世界における地域問題の政治経済的背景と、地域政策・地域計画策定における“地域”的概念を援用することの実践的・政治的意味について考察する。

以上をもって、今回のシンポジウムの課題における総論的序論的な報告としたい。

経済地域区分

一 基本的データ処理過程とその問題点

高橋 潤 二 郎

最近の地域開発政策の進展、地域経済分析方法の発展により、中央官庁、地方自治体、更に、大学をはじめさまざまな調査研究組織がそれぞれ独自の地域区分を設定し、それにもとづいて作業をすすめるようになったが、これら地域区分に共通にみられる特色は、それがいわゆる形式地域、ブロードウェイによる計画地域 planning region として規定された性格をより強くもっていることだろう。たとえば、新全国総会開発計画は、日本全土にわたって、七つのブロックと三つの地帯を設定しているが、これらが、たとえ機能性をいし同質性原理にもとづいて区割されたものであるにせよ本質的には開発を目的として設定された計画地域であることに変わりはない。これと同様に経済企画庁をはじめ、いくつかの研究機関が試みている地域経済計量モデルにおける地域区分も、シミュレーションを通じて日本全土にわたる経済循環の実態を把握し、将来の動向を予測するために設定されたものであり、研究の final output というよりは、むしろ、研究を行うための作業仮設的な地域区分だと言ってよいものであろう。

このような最近の動向は、しかし、一方における実質地域としての地域概念の重要性を否定するものではない。むしろこのタイプの地域区分、すなわち経済諸現象の空間的分布と相互関係の実態を可能なかぎり正確かつアップトゥデートなかたちで把握しこれにもとづいて地域の設定を試みる、いわば研究の final output としての地域（区分）は以前にもよして重要となりつつあると思われる。

他方、地域区分そのものの手法はどうかといえば、最近の統計的技法の導入によって、ますます技術的に高度化しているのが現状である。主成分分析や因子分析等の多変量分析の導入によって、非常に多数の変数からいわゆる合成変数を抽出することが可能となり、マハラノビスの汎距離その他の距離概念の採用により分類過程における精度もより高いものとなりつつある。更にこれら多変量分析や多次元空間における対象布置とその距離測定はコンピュータの導入によって、より身近かなものとなっている。

しかしながら、このような技術の高度化、データ処理の機械化がただちに作業過程の客観性、すなわちだれが試みても同一の結果を得るという意味での標準化をもたらしたかというところ

ではない。やや逆説めくが、このような技術の高度化によって、データ処理過程における研究者の経験や勘にもとづく判断の余地がなくなってきたどころか、むしろ、ある意味では拡大したかの感がある。それは丁度地形図か航空写真の導入が従来の相観 (physiognomy) に比べより大なる客観性をもたらしながらも、そこに読図というかたちで、新たな研究者の「主観的」判断の余地を残したのと全く同じであるといつてよい。

いわゆる科学的方法が果して経験や勘にもとづく「主観的」判断の排除を条件としているか否か、これは議論に値する科学哲学上の大問題であるが、少くとも現実にそのような個人的判断が作業結果に少なからぬ影響をあたえているかぎり、相互に自己の経験を披歴し、意見の交換を行うことによって、研究者全体の記憶総量をたかめることがよりよい地域区分のために必要であろう。

この意味で、本報告は、最近報告者の試みた経済地域区分を例にとり、実質的な経済地域区分の概念的フレームワークとそれにもとづく基本的データ処理過程およびその問題点を提示しようとするものである。

検討の対象とされる事例は、1965年の都道府県別経済統計(60変数)を基礎的データとして、これを主成分分析し、その結果抽出された10成分(合成変数)に関するスコアを対象にクラスター分析を試みたものである。

経済地域概念への接近

—国民経済の地域構造—

石原照敏

この発表は事例研究をよりどころとして、国民経済、とりわけ日本資本主義における経済地域の存在態様 — とくに、その構造 — を把握することを通じて、経済地域とは何かという問題にアプローチしようとするものである。

I

国民経済の地域構造（経済地域構造）— それは、端的に言えば、社会的分業の発展とともに生じた諸経済地域が、国民経済の一環として、相互に関連しながら、いかに組織されているのかということであろう — の大まかなシエーマはいかなるものであろうか。この点は、社会的分業の発展にともなう地域的分業の進展との関連で、次のように把握される。商品経済・資本主義経済の発展とともに、ほぼ同質的な経済空間が、工業地域とか農業地域 — 農業地域内部においては、酪農地域とか果樹栽培地域 — などの部門別経済地域へ分化するが、このような地域的分業の進展のプロセスは、また、諸々の農業地域や工業地域が、都市を中心とした経済地域に統合されるプロセスであるともいえる。

国民経済における基本的な経済地域は、地域的分業とともに発生した工業地域、農業地域などの部門別経済地域を統合した大都市経済圏であろう。この基本的な経済地域は、部門別経済地域を統合し、国民経済の内部に存在する経済地域としてはもっとも多様な経済機能を備えているが、国民経済ほどの経済的自律性を備えているわけではなく、経済機能の分担の態様からみて、それぞれ、特異性をもちながら、他のいくつかの基本的な経済地域とともに、国民経済に統合されているものと考えられる。この基本的な経済地域の構成部分となりうる部門別経済地域は、基本的な経済地域の中核となる大都市と緊密な関連のある部門別経済地域だけである。

部門別経済地域は、その構成単位（以下、地域構成単位とよぶ）を統合し、ある産業部門の生産に特化された工業地域とか農業地域などの経済地域であり、他のいくつかの部門別経済地域とともに、基本的な経済地域に統合されているものと考えられる。この部門別経済地域の構成

単位（地域構成単位）は、空間における労働力、資本、および土地と、その空間的相互依存関係によって構成された一生産単位である。部門経済地域は、地域構成単位の質的差異により、他の部門別経済地域から区別される。

かくして、国民経済は、一般的にいえば、部門別経済地域を統合した基本的な経済地域の複合によって組織されていることになる。

II

国民経済における基本的な経済地域の一部門経済地域としての農業専門地域が、特殊具体的な場所に形成され、国民経済の地域構造の一環として組織されている場合に、いかなる原理が貫徹しているのであろうか。

まず、特殊具体的な場所に、特定の農業地域が形成されるのは、いかなる原理にもとづいているのであろうか。この場合、生産力の発展程度が問題であるだけでなく、国家独占資本主義段階における小機体制の下では、こういう自然条件や位置条件のところには、こういう農業地域が形成されるということが問題なのである。

だが、この問題を解明するためには、農業地域が、国民経済の地域構造の一環を、いかにかたちづけているのかという問題を考察しなければならない。地域論の分野においては、地域の実質的内容をかたちづくる地域構造の問題が、あまり深く掘りさげて研究されず、もっぱら、地域区分の問題が研究されている。地域論において、機能的観点が考慮されることがあっても、それは何よりも、地域のひろがりを画定するためであった。もちろん、これまで、地域構造の問題が全く論じられなかったわけではない。しかし、地域構造の問題が論じられる場合でも、地域構造は、単に、地域間相互依存関係と同一視されていた場合が多いのであって、地域間相互対立関係の問題が、地域構造論のなかに、正当に、位置づけられてはいなかったのである。地域間相互依存関係だけでなく、地域間相互対立関係を、地域構造論のなかに正当に、位置づけることによって、われわれは、国民経済において、経済的に進んだ地域と経済的におくれた地域との格差がいかにして生ずるのかということ、ならびに国民経済における経済地域の形成に、国家が、何故に、いかにしてかわり合うのかということ、さらに国民経済における経済地域の形成と構造とが、実は、国家を媒介として、密接にからみ合っていること——この問題は、現代の国民経済における経済地域の本質ともいふべき重要な問題である——を認識することができるのである。

經 济 地 理 学 会
事 務 局

東京都千代田区神田駿河台1-1
明治大学 大学院 地理学研究室内
TEL 東京(293)5811番(内線362)
振替口座 東京 12118 番

關 東 支 部

明治大学 大学院 地理学研究室内
〔明治大学 4号館 第3研究室(火木土)〕

關 西 支 部

大阪市立大学 新館 416号室
大阪市住吉区杉本町